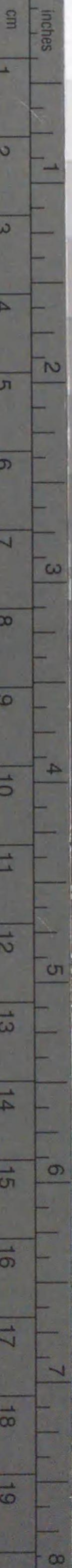


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

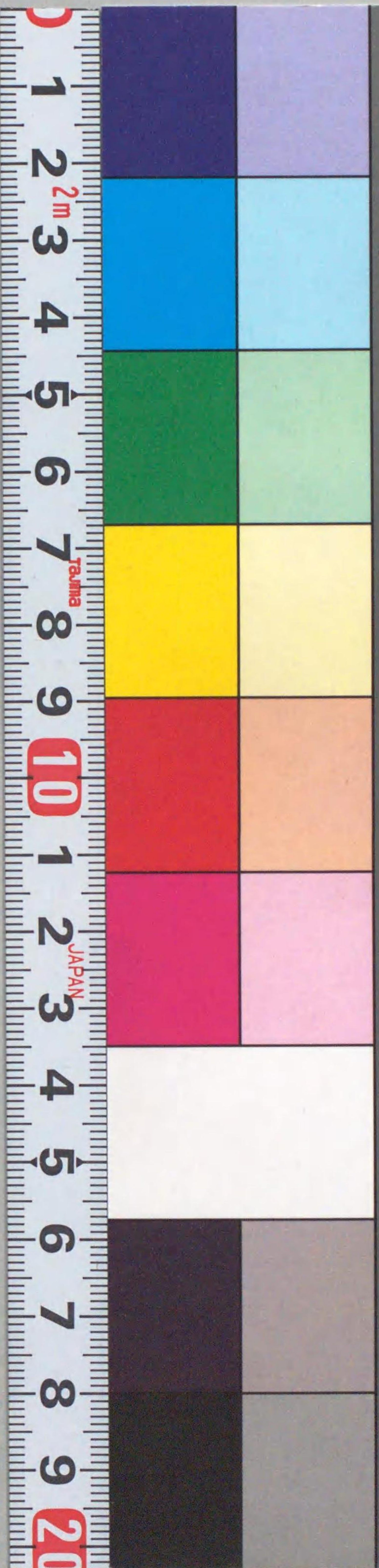
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



連理秘抄

911.2

N872_ル

古典保
在會亭

911.2N872A



245182

此書未定為樂法
心之不可用之

以此中一為正

正到



連理秘抄

古歌有長哥短歌旋頭混本之違別
蓋連歌可以類矣近古以來舉代握玩
風俗所向何必禰之好事之倫各正其
志吟詠性情者可成思無非之一助焉仍
今為隨意蒙之求只述自然之趣任筆
註銷遺漏幾許个中若加切瑣之功者
向後盡資准的之要耶

連歌之序の辭行也む——百歌二十歌を
うてはしめる事そたてて思ふは句をそと下
りゆりてしりきしきといふなりけり
是河原のらまがけり水と塔とあけて
る——曰はといひなり家持をるをけり
あそびながら——はしりかたは事なり
子勅撰よとたはくえる天曆の西へて
字をいひしはうたはら後野内侍多
よあをきしりやまらるるはしり

ト

5

やまをきしんしすくきるはらや一産の像
成りといふも中此とほつ家とついで月
以夜書乃胡あふこきくうの瓦屋のやうに書
ちと書付やうし志あふと連保乃に改らるは
名羽院こふまこの道とこふしめ後て定家
忠隆つらと細いなかとこふしめらるる
百穂と句と書さして後をせつたがこふ人
とわしく記しこふしつこふを以て抄とす
代こふはあふすあふして式目たふあふさ

うしわが家も民てこれ相續して貴殿を
守りゆつてこふをいふくさかつて家
式をとわしくほあせしはあせか相てあ道
みさ達をよる却つてあふれさわ比下と
むの十月以前の指客とすわはくまこ産
時と中式新式かといいて方とすま
あすつらほつて風あつたすは何事と株をま
もふまて下あふこふのこふしつら
まはつて備執となすこふとす
高村の時近代の

しら井の南とありく會し僻業業と息をよ
まかせていし右より志すはこせらふ他と御志
ぬらりうらむと自とすす人とも也

一 道言ふはむたこころても侍りまふは會しは
しり師匠のたしゆると、後よふと常
こころえりてらきひてふ年よまよしる會し
いふらす事とも堪んましるやんやんいふら
事なしと堪んものころこま合して藝
せんの中く一向せんがらうとたしゆら初

乃禮こふ用しす會し事也遠志お志し
色たより後たしゆらやんて道言は指すはここの
いがるは風也よこのて南をよと平也風折と彼
争つする亦く懐紙とえんてましくいとも詞とつ
て風法とろくする會しは堪んは練習しては地と
はむらりて外は揚古いあらうしすまのしよ三代集
源氏の物語仔細地がらう名ふは云枕はうのまき
いと被えしして有興とゆふとつるまはしこも
の出言をす得し事ありとせんとししやうらとこ

其の事も練習し、(その事)に於て尚ほくはるる
去りたる事あり、(その事)に於て尚ほくはるる
得る事初この人(その事)に於て尚ほくはるる
くし、(その事)に於て尚ほくはるる
がし、(その事)に於て尚ほくはるる
在、(その事)に於て尚ほくはるる

一、(その事)に於て尚ほくはるる
よ、(その事)に於て尚ほくはるる
は、(その事)に於て尚ほくはるる

物(その事)に於て尚ほくはるる
の(その事)に於て尚ほくはるる
行(その事)に於て尚ほくはるる
中(その事)に於て尚ほくはるる
甲(その事)に於て尚ほくはるる
い(その事)に於て尚ほくはるる
物(その事)に於て尚ほくはるる
の(その事)に於て尚ほくはるる
は、(その事)に於て尚ほくはるる
是(その事)に於て尚ほくはるる

こゝへんたつたのしにけいこのしつりていせつたの
らふらふたつたのしにけいこのしつりていせつたの
こゝへんたつたのしにけいこのしつりていせつたの
源氏國名たるの事

一 塩地をたつたのしにけいこのしつりていせつたの
はかよつたのしにけいこのしつりていせつたの
能よもつたのしにけいこのしつりていせつたの
及へつたのしにけいこのしつりていせつたの
物の中にもつたのしにけいこのしつりていせつたの
且さよつたのしにけいこのしつりていせつたの

こゝへんたつたのしにけいこのしつりていせつたの
もつたのしにけいこのしつりていせつたの
つたのしにけいこのしつりていせつたの
右よつたのしにけいこのしつりていせつたの

一 連歌の所とて極端にわづらひしつりていせつたの
ゆつたのしにけいこのしつりていせつたの
はかよつたのしにけいこのしつりていせつたの
の今にわづらひしつりていせつたの
つたのしにけいこのしつりていせつたの
つたのしにけいこのしつりていせつたの

かえとさうして膳屋する事いふは但是に膳屋
まじのしにちびりまじのし使ひのし
にけりす

一 序と法り人となし
とらぬ會一 雪月の時木の下す
たらする代り人となし
もろくもたろく膳屋あひの比量あし
むつ一 心とむいれもの
むく使ありし 桐入度序大飲言の序
りす

百歌一 序と法り人となし
かいてこの本まの序とむいれもの
一 序と法り人となし

一 會者一 膳屋とむいれもの
とらぬ會一 雪月の時木の下す
たらする代り人となし
もろくもたろく膳屋あひの比量あし
むつ一 心とむいれもの
むく使ありし 桐入度序大飲言の序
りす

心付
こと集らうのいふことすしこてんものし
付し

詞付
らうあひのいふことすしここと集らうきりり
て付らう

理句
ふはけらぬやうにてししししししし
ししししし

餘情
これいふしついでいふしついでいふし
あつておししししし

相對
春より秋期々々山より路らうと
類あり

引遠
母の教へるといふものうに同じと
是れ引と平の興ありといふことか

隠題
考ふがといふことこの中らうり地の花かと
こと集らうかき

本亭
一首こらうりつては遠うあふけり
仲のうらうらうらうのうらうらう
の亭とあふけり甲乙と新古といふ
者中亭よきし中亭ははる百首の作者
とあふけりよきし中亭のうらうらう

石 九月よき月

紅葉 善秋 十月にき

霜霜 時雨落葉

待雪 雪雪 雪雪

二月よき雪 霰

三月よき雪

歳雪

早梅但入冬

け外時よりして南府へ所行ん

とありくしこあるへよみ都より野山吉山待

まことおぼしめしある事分制す也都を

遊遊ふくしつたよのしほおきくはてやい

ぬ厚しる夜を言はれんすし但の月の

長居よき

夜書のこと事の時あるし前余又

一 脇の句又大事也此のいふやいすあへ

とちり川の舟といはれし句よきし

句は極りしものありあからむもいふ

柳かきくしよせお思ひし海やよき

ししはるのうしれり洛中を野山にせ

事發句よきししししししししし

てんしししししししししししし

てんしししししししししししし

連歌式目

一 韻字

物の名と詞の字と入れとて一物一詞と
物名と詞の字と入れとて一物一詞と
法、字のよゝみ、説
打越と一箇他准之

一 輻廻

量地と一詞と付て又紅葉と付て
舟と一詞と付て一詞と付て
煙と一詞と付て又果ては秋の歌と
付て一詞と

他准之

一 遠輻廻

那令花と云句下り山の歌と付て又
教句一座下り一箇と

他准之

一 本歌

三首に「つる」(つる) 在院物語 但し「けすあ」は是と燈
へつと作すう等う心とつるは代の三つあり
是と可(つ)凡所古し「某」の作を「下」用之
予ハ源行院百首の作者と云心とつるは又詩者
と代勅撰古人の三つと云う「沈」を代と
引く

一 一座一句物

若菜 藤 欵冬 薺 躑 杜若

山花地類

鹿 猿 鶯 郭公 螢 蟬 口くし

櫻貝 櫻外子 無名虫

山動物類

昔 古 夕暮 昨日 五月雨 夕暮 村而

牛而 鼠 木ノ段 かくれ 懸樋 梯

朔日 夕日 朔月 夕月

此のいほはきて若る

一 一 度二句物

春月 春月

夏月 夏月

冬月 冬月

曉 曉

春下 春下

秋風 秋風

松風 松風

夕 夕

今日 今日

いず いず

故郷 故郷

厚 厚

様字 様字

宿 宿

西 西

老 老

成 成

小 小

木 木

い い

此類並示として二句用之

玄しく ちきま くらん へん

芽 さいく して 二度用之 代巻

一 一 度三句物

花三句 花三句

梅 梅

柳 柳

桜 桜

木 木

柳 柳

柳 柳

紅梅 紅梅

木の葉 木の葉

却 却

傾 傾

鐘 鐘

久 久

此類並示として二句用之

一 一 度四句物

雪 三十一

有明 四十一

代 一 代 一 代 一

水 三十一 水 一 水 一 水 一

此類四句下可也

一 教度下可物

月 七

露 日

露 日

派 日

夢 日

松 日

竹 日

舟 日

浪 日

水 日

類 日

教 日

度 日

下 日

可 日

物 日

一 下極打越物

か

い

用

下極打越

春 日

花 日

野 日

冬 日

野 日

同 日

字 日

人 日

倫 日

礎 日

夜 日

思 日

考 日

古 日

心 日

心 日

心 日

心 日

心 日

心 日

行 日

願 日

楸 日

昔 日

下 日

音 日

多 日

の 日

遠 日

下 日

お 日

あ 日

あ 日

後 日

あしき 浮木 華白 流木 善信草木

此等類非植物也唯く

一 軒草蒲 米松山 似花雲 杉木

は赤敷植物也

一 木葉時雨 月の霜

此赤敷降地也

一 夕日夕 時雨時の字 五月雨と月夜祭乃

音羽下音 名にの春日の音

は赤敷植物

一 舎改 不破 足柄用之 下場山 山をく 用非下場

一 畫の字 下日 下下場

一 木い 大字 随時 下下場 大い あ 行越と下下

一 下下場石と 下下場と 下下場と 下下場と 下下場と

一 下下場と 下下場と 下下場と 下下場と 下下場と

一 下下場と 下下場と 下下場と 下下場と 下下場と

一 下下場と 下下場と 下下場と 下下場と 下下場と

作らるる也打越作らるる也又打越長と云ふ
二繩と付て又短きと云ふ打付く皆是作也く
るひくと云ふ付是同也

他條之

蕪濁を木也 藤を草也

音聲を字と云ふ 響るる物也

音聲を字と云ふ 響るる物也

物を難ししと云ふ 打也

有暇を可るる也 約也

雪の死 ちるり 地極也

しり屋 文字也 ちるり 打也

ちるり 打也

石橋を水也 但山のにはある水也 打也

ちるり 打也 字を付て下場水也

月款は紅葉ちるり也 但病を付て 打也

ちるり 打也 月事也

ちるり 打也 ちるり 打也

一 てにとはの字相合て付へ〜と

一 下定の事

雪水のまじり 野焼 小田 子 雑 至 燈

以上者也

神まじり 田とも ちくの神 鳥乃〜

こと反也

ひくぬし〜 鳴砂 家の時 じやい

すぬ〜 風 くら〜 小田 小鷹 坊 枯 藤 後

こと所也

木〜 沫雪 源の時 庭火

こと冬也

山 橋 遠 かの 葉 すすり〜 の ぬ

小 山 子 ぬき ぬき ぬき ぬき

以上兼也 他准之

あやほそ ぬるて 雪 朝 暁 ありは

夢の世 苑の夢 くの 曉 月の 朝 霧の 雲 霧

こと北東地准之

河字の
明方 螢 故基 大 造 森 床
いふ也地准之

一 坪用事

山 坪

思 茅 瓦 上 藁 坂 瓦 谷 崎 小 用

いふ此新坪也

月 用

梯 漣 松 木 灰 電

こと此は類用也

水 山 枿

岩 橋 枕 洞 棗 薪 妻 木 漣 津 せ

こと此は類用下場山

水 色 坪

海 浦 入 江 漆 堤 渚 嶋 松 寺 磯 石
みさけ 水 子 沼 河 池

いよめけ頼所也

同甲

舟 浮木 流 浪 水 水 飛 鳥 鴨 子 子 草 子
鳩 かくは 可 運 内 こと 又 子 子 子 子 子 子 子 子
隘 志 不 屋 あり こと 子 子 子 子 子 子 子 子

照極

いよめけ頼所也

北水之物

砂 とき 倉 鹿 の あり 鶴 踏 草 子 子 子 子 子 子 子 子

杜若 高 蒲 の の あり あり

いよめけ頼所也

長所所

軒 端 床 里 鹿 子 子 子 子 子 子 子 子

戸 子 子 窓 かく あり 壁 障 畫 岩 屋

いよめけ頼所也

同甲

とと色 庭

山け藪可也

北居に地

すみの 花ま井

じし路 うきん

いさひはたきふ所は可

東にこら楽

持銅舟

益 蚊巻火

いさひはたき

いさひはたき

枕

とこ

神しく 衣く 袴

枕

山け藪可也

人倫

人 親 友 父 母 難 用 守

山け藪可也

北人倫地

一估冲抄叙反存見勾送與首
口傳述以等所後作款就中亦所
存無一事相連作商何重之更行
代龜龍何物可過之作式陸恐作
無極上為坊學故依仰如卷作也

貞和五年七月十七日

叔濟別

此抄以小序

策 與素 等為規模

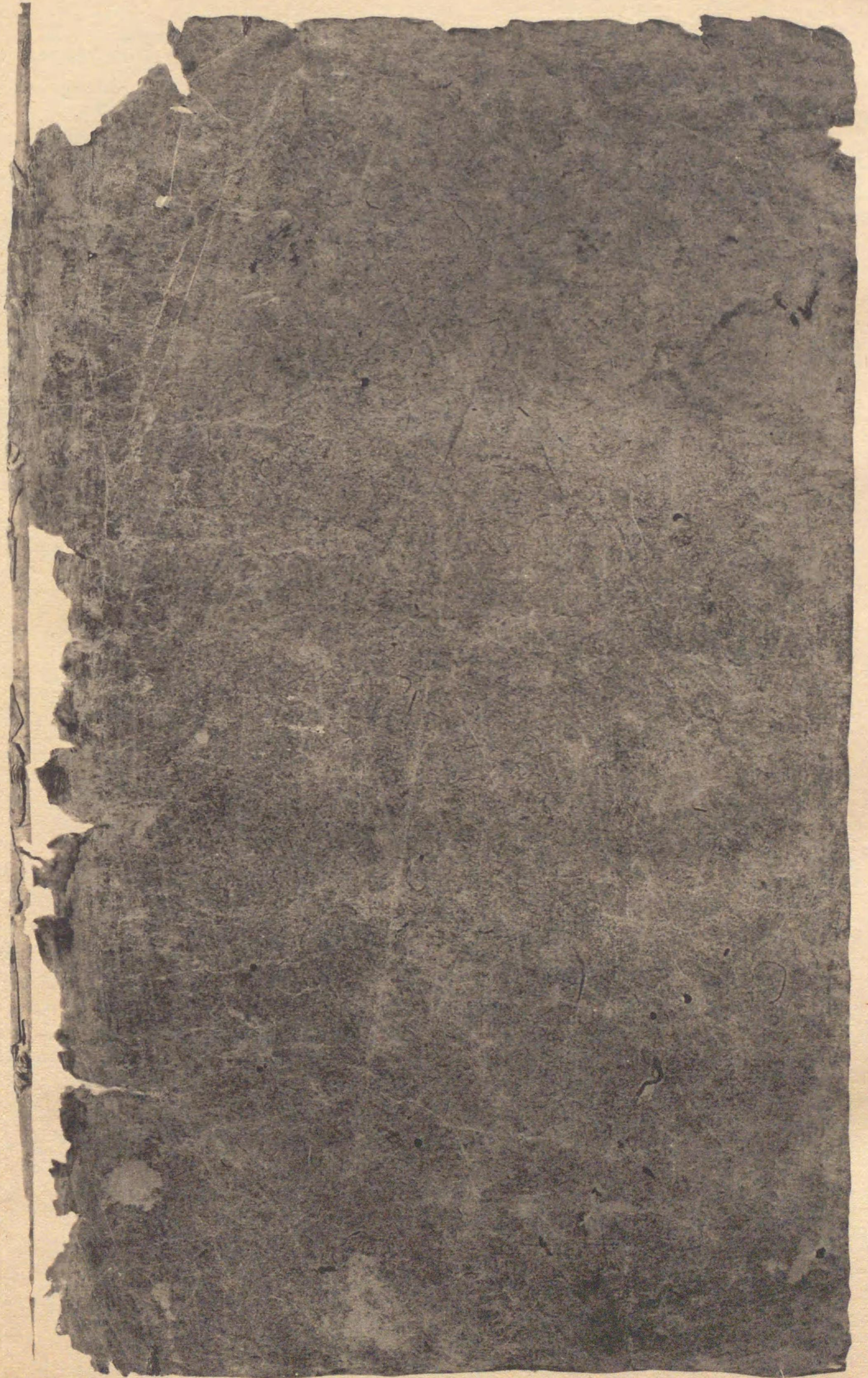
文不可有外身人而已

用路鬼朱

別

後普光園攝政 良基公 御作也

可秘



猪熊信男氏藏 連理秘抄 解説

本書は京都猪熊信男氏の藏にして他に類本の存するを知らず。恐らくは今回はじめて世に紹介せらるるものなるべし。

本書は全一冊斐紙胡蝶装の冊子なり。縦七寸九分五厘横五寸にして紙数は表紙共木口四十二葉なり。一紙両面に墨書し、一面十行九行又は八行にして界なし。項目の初等に朱の勾點を施す。その紙質書風を以て推すに、室町時代中期を下らざるもの如し。

表紙表面の右下端の邊に二字の署名あれど磨滅して讀むべからず。上字は「走」の扁のみ認められ、下字は辛うじて「濟」と認めらる。これ其の所持せし人の名ならむ。又同じ面の右部半程より稍下りて塔形の墨色の印影の彷彿として認めらるるが、これも明かならず。この署名又印文の知らるるに至らば、或は書寫若くは傳來を確むるすがともなるべきに、然らざるは遺憾なりといふべし。

本書奥書の末に、二條良基の作なる由記せり。その筆者は知るべきにあらぬが、本文の筆者にあらざることば明かなり。この語によれば、本書はかの連歌道勃興時代の保護者として名高き二條良基の著たりと知らる。而してその前には著者の奥書ありて「關路鬼木」と署せり。これは良基の自ら稱したる所なるべきが、「鬼木」は大臣の異稱なる「槐」を二字に分ちたるものなるべく「關路」は未だ明確なる案を得ずといへども、恐らくは「棘路」といふ成語に准じて「關白」をかくいひて、下の「鬼木」の縁語としたるにあらざるか。良基の關白たりしは前後二回あるが、その初度は貞和二年より延文二年までにして、本書の救濟の奥書せし時はまさに初度に關白たりし時に當れり。

さて本書には當時儒學にて名高かりし玄惠法印の小序と同じく連歌道の第一人者たりし救濟法師の奥書とありて、これの存するを以て面目とする由著者の記する所なるが、その序の文を讀むに他人の著に加へたる言にあらすして自序の趣に聞ゆるはいぶかしといふべし。而してそれに玄惠の名も年月もなきなり。救濟の跋には貞和五年七月十七日の署名あり。救濟はこれよりもなほ後まで生存せし事明かなるが故に、この跋文に於いては疑を容るべき餘地なしとす。玄惠は正平五（觀應元）年に歿したる人なれば、上の小序がまさしくその筆に出でたりとし、その草せし年を救濟の跋と同じ年とせば、その死去の前年に當るが故に、亦あり得べき事といふべし。或は著者の爲に代作せしものをば、良基が面目の爲に、之を告白したるにあらざるか。

本書の由來は、本文の末にいへるにて明かなるが、自らは誤多かるべき由謙遜せれど、救濟が本書の價值に言及せるを讀めば、當時の連歌の道如何を下すべきものなるを思はしむるものあり。表紙の見返に又著者の語あり。之によれば本書には未定の草案ありてさきに世に流布したる由にして、本書はその清撰たるものなりといへり。之によりても本書の當時の連歌道に於ける位置をたしうべし。

良基の連歌道に於ける著書はその各方面にわたれり。連歌集の最初のものたる菟波集あり、連歌の式目として永く後世の規範となりたる應安新式あり、又作法上の心得を説きたるものに擊蒙句法知連抄あり、更にその道の沿革より百般の事にわたりて説ける筑波問答あり。以上の數種は從來世に知られたる所なるが、今又本書の出づるに及びてその著書一種を加へたるなり。

今本書に説ける所を見るに、良基の著として疑ふべきふしを見ざるものなるが、本書は事實上二部に分れて、前半には作句の心法を主として説き、後半には式目をあげたり。而して前半に説ける所はその沿革、句作の心得全般に亘

りて肝要をあげ、前述の數著と必ずしも重複せず。當時の連歌の心得を知らむとするには必須の書たり。加之良基の連歌道に關する著として現に知られたるものにては最初のものにして、現存の連歌學書としても亦最も古きものたるなり。其の後半たる連歌式目は更に本書をして重からしむるものなり。抑も今の連歌の式目は應安の新式に基づくこと明かなりといへども、その式目は後世數回の修補を経たるものにして、應安の時の面目をば知ること能はざるものなるのみならず、その後に修訂せし肖柏の式目も紹巴の傳へしもののみを見て、その前のものを知らざりしが、吾人は近年幸にして肖柏の式目と認むべきもの（天文十四年書寫本鹿兒島圖書館藏）を知るを得たりといへども、未だそれが應安の新式と如何の差異あるかを知るを得ざりしなり。然るに本書はその應安新式制定以前のものなること明かなるが、この式目の奥にいへる旨趣と應安新式の奥書の旨趣と略同一なれば、二者同一の精神にて編せられしことは明かなり。この故にこの式目はもとより應安新式そのものにあらずといへどもその實際は少くとも相ざる事遠からざるものなるべく、又應安の制定以前より既にかゝる企の存したることを證すといふべくして連歌史上頗る貴重なるものなりとす。

今この式目の價值を一々説く違を有せざるが、肖柏の式目と比照するに、大局に於いては相通する所あれど、又趣を異にする所あり。肖柏の式の遙に精細になれる點はもとより後の増補なるべきが、又本式目の方精細なる部分もあり。されど要するに本式目は肖柏のよりは簡易なるものなりとす。これらはもとより歴史的觀察の上より見て當然の事なるが、その内容の上にも頗る注目すべき點少からず。たとへば「可隔七句物」の項には「同季」の一目のみありて肖柏の式に見る他の目はなく、又肖柏の式に「一座五句物」とあるその項が全然この式目になくして、その目たる「世」梅が「四句物」「三句物」の中に存し、「橋」は全くあげられぬなど、かくの如き項と目との間に幾何の變遷ありしかを見むとするものにとりては頗る重要な價值を示すものなり。

以上の如く、本書は連歌學書の最古のものといふべきのみならず、その内容に於いて最も貴重なるものなり。されど、もとより傳寫本なれば誤なきにあらず。それらには、既に本書にその案を旁書せるあれど、その旁書は淡墨にて書けり。その他にもなほあり。その著しきものは

原本第八張裏第四行	「階」は「墮」の誤	同	第十一張裏第九行	「勝希」は「劣」の誤	
同	第廿六張裏第五行	「可謙」は「嫌」の誤	同	第廿九張表第六行	「雖躰」は「改」の誤
同	第卅張第八行	「水鳥」は「水邊」の誤	同	第卅六張表第七行	「植物」は「雜物」の誤

この最後の點は重大なる誤なりと認めらる。これは肖柏以後の式目にも「雜物体用事」とありて誤なること著しきなり。

本書には上の如き誤寫あり。しかれどもその學術上の價值はこれらによりて大に減するものにあらず。連歌史の研究資料として本會が最初に本書を採りし微意またその價值の大なるを認めたるによるなり。

昭和三年十一月二日

山田孝雄

昭和三年十二月廿五日印刷
昭和三年十二月廿八日發行

(非賣品)

發行兼印刷者 古典保存會

右代表者

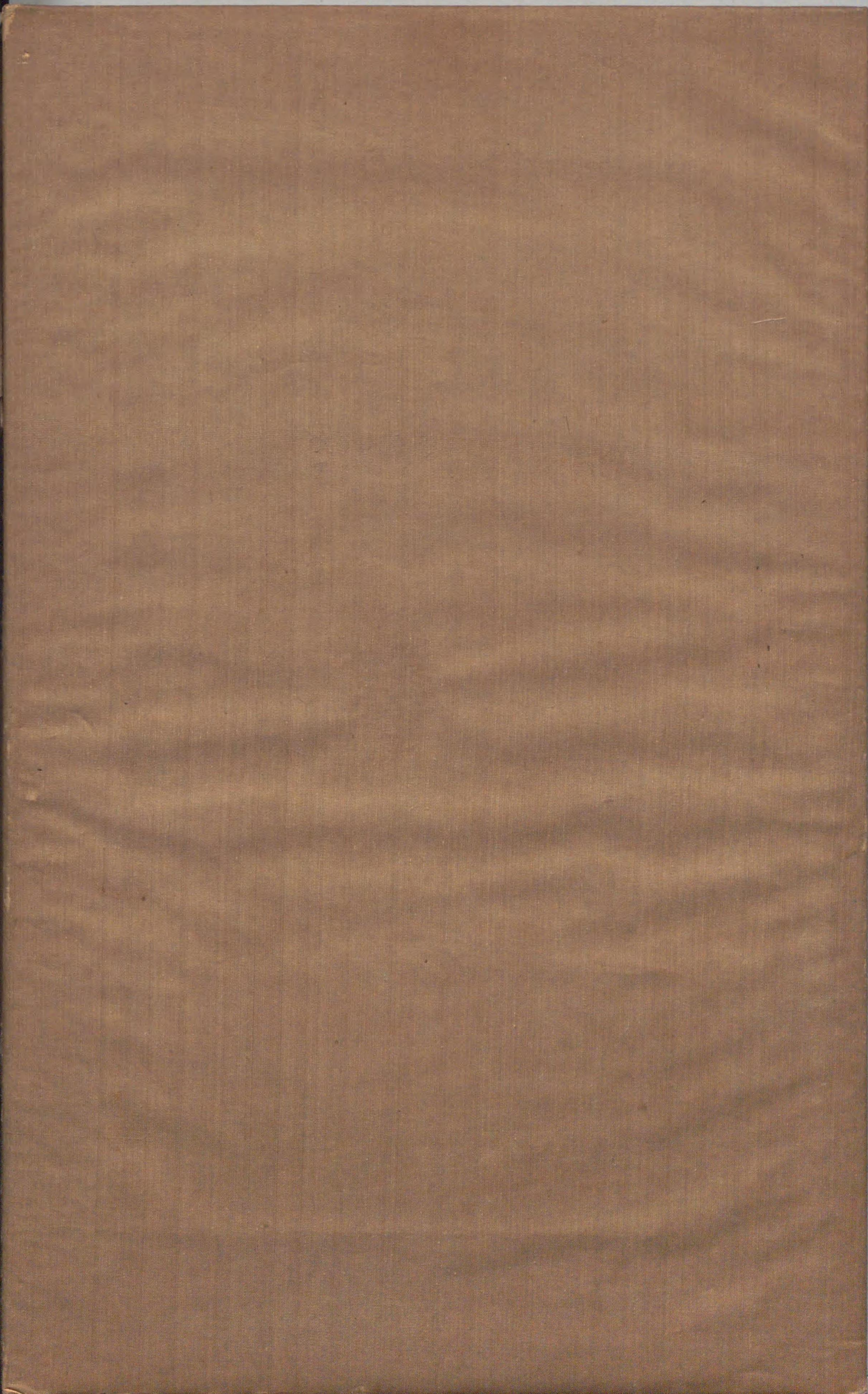
東京市下谷區上野公園東園
七條

印刷所 金屬版印刷所

東京市神田區小柳町

古典保存會事務所

電話神田三七八九番
振替口座東京四四九四八番



911.2
N872r



00245182

龜田文庫

